読売 教育ネットワーク

社会はまるごと学校――
すべての大人が先生です

四角いファインダーから世界を切り取る子どもたち（東京・中野区立江古田小で／２・３面へ）

巻頭特集 写真出前授業10年 **見て、撮って、気持ち伝えて** 2・3

読売教育ネットワーク 3周年フォーラム 4・5

第4回 インターハイ新聞コンクール 最優秀賞に鳥取城北高校 6・7

ミャンマーに高校生6人 海外プロジェクト探検隊 8・9

第66回読売教育賞 最優秀賞に「まわしよみ新聞実行委」など 10

出前授業 東京・第二辰巳小× フィリップス
神奈川・大船中×セブンイレブン、三菱東京UFJ銀行、日立製作所、読売新聞 11

リレーエッセー 米アーラム大「AIを開発し、人間の謎を解く」 12

2017.11
Vol.35

「生命」 村本 暁（埼玉・鳩山小６年）

見て、撮って、気持ち伝えて

10年 出前授業 写真

読売新聞社が小中高校を対象に行っている写真出前授業「見る・撮る・伝える」（協力・キヤノン）が10年を迎えた。これまでに写真記者が延べ２００校以上で授業を行い、１万人以上の子どもたちに写真の撮り方やカメラの扱い方をアドバイスした。読売新聞教育ネットワーク事務局の横山聡・専任次長が講師として出向いた東京都中野区立江古田小学校（伊波喜一校長）での授業をリポートする。

写す？ 撮る？

「写すのではなく、撮ることを覚えてください」

横山講師の言葉に、子どもたちはきょとんとした目を向ける。スマートフォンもデジカメも、今はほとんどオート。シャッターを押せば写る。でも、「撮る」ためには、相手に話しかけ、コミュニケーションをとりながら、時にはぐっと近寄らなければならない。「そうしないと『撮ること』は出来ません」。６年１組と２組計50人の子どもたちは、納得したようにうなずいたり、少し首をかしげたり。

他の学校での授業で子どもたちが撮った作品が次々に正面のテレビモニターに映し出される。犬の赤い舌と前足しか見えない写真。庭で愛犬にカメラを向けたら喜んでとびついてきた。あわててシャッターを切ったという。「この写真、いいなと思う人？」。ほとんどいない。「失敗だと思う人？」。どっと手が上がる。「撮った本人は、失敗という気持ちでいっぱいだった。でも、犬が飛びついてきたときのワーとか、オーという気持ちが大事。写真に失敗作はないんです」

小５男子（福島・2007年）

いつ撮る？

視聴覚室の床に座った子どもたちの目が次第に熱を帯びてくる。横山講師が続ける。「きれいな景色だな、帰りに撮ろうと思っても、帰り道では自分の気持ちが変わっているかもしれないよね。きれいだなと思った時に撮らないと」

出前授業 Photo Selection

【10年を振り返って】子どもはスナップ写真の名手だ。大人の想定や予定調和の枠をいとも軽々と飛び越えて切り取る数々のシーン。彼らの作品を、添えられた言葉・文章とともに読み解くと、日常の中にも大きな驚きや感動があるものだとつくづく教えられる。子どもだと侮るなかれ。大人にはすでに手が届かなくなった世界がそこにある。

横山聡　よこやまさとし
1983年読売新聞入社。写真記者としてバンコク支局勤務等を経て2007年からよみうり写真大賞事務局。2017年から教育ネットワーク事務局。

「ぼくを入れてニャー」 鈴木千秋（埼玉・鳩山小６年）

「ねえねえ、教えて!」 小久保颯天（埼玉・鳩山小６年）

「水がまねっこ」 園田涼奈（東京・江古田小６年）

組み写真「ピュア」の１枚 上野裕子（川崎市立宮内中３年）

「雨の音楽」 牧野亜未（東京・江古田小６年）

「Red jewelry」 末信優成（東京・入谷中３年）

「アピール中」 小高実優（埼玉・鳩山小６年）

「気持ちの配達屋」 浅野悠斗（埼玉・蕨市立北小６年）

「のぞいてる」 望月莉生（東京・江古田小６年）

「写真は記録だ」 池田飛鳥（東京・高井戸小６年）

「図工室の虹」 溝口あず（東京・国分寺市立第五小６年）

1組の土田明星（つちだあかり）さん（12）は、「これまでの作品を見せてもらって、同じようなものを撮影しても、撮る人によって一枚一枚違うんだと思った。きれいな花を色々な角度で撮ったり、空や雲を撮ったりしたい」とカメラを持つのが待ち遠しい様子だ。

江古田小での写真出前授業

写真撮ったぞ

いよいよ一人ひとりにカメラが手渡される。デジタル一眼レフカメラ。軽い機種だが、重さも大きさもスマホの何倍もある。扱い方を教わり、ファインダーをのぞく。互いに撮り合い、写真を見せ合う。これから5日間、学校で自宅で、自由に撮影してもらう。

6年2組・笹浪陸君（ささなみりく）（11）は「これまで小型カメラや母のスマートフォンでしか撮影したことがなくて、初めて一眼レフのカメラで写真を撮った。シャッターボタンを押したときの感じが違っていて、ちゃんと写真を撮ったぞ、という気持ちになった。面白い写真をたくさん撮ってみたい」と話す。

2回目の授業でお互いに作品を選び、3回目の授業で発表して、感想を話し合った。家族、友人、ペット、風景。それぞれイチ押しのショットに子どもたちの笑顔が弾けた。

■6年2組担任 笠原駿教諭（33）の話

身近にあるものでも角度を変えて見ると違って見えることや、何かを自分なりに表現することの楽しさを知ってほしいと思った。教科の得意、不得意とは別に、写真を撮ることが子どもたちにとって新たな発見につながるのではないか。

カメラマンによる出前授業
「見る・撮る・伝える」

写真出前授業は、読売新聞の写真大賞事務局が2007年に始め、現在は教育ネットワーク事務局が担当している。授業は、1コース3回。キヤノンから寄贈された一眼レフカメラを使って、写真記者がカメラの扱い方から対象物に対する効果あるアングル設定の仕方や光のあて方などを指導する。2018年度の授業は今後募集する予定。

「学び」支援の輪 さらに大きく

読売教育ネットワーク 3周年フォーラム

「読売教育ネットワーク」創設3周年を記念したフォーラムの講演会と交流会が11月6日、東京・大手町で開かれ、教育関係者と企業関係者約90人が参加、教育現場と社会をつなぐ接点としての活動を振り返りながら、次世代を担う若者の育成について語り合った。

講演する東京学芸大学付属世田谷小学校教諭の沼田晶弘さん

ぬまっち先生講演「信頼が生む子どものやる気」

講演会では、児童の自主性を引き出す指導法で知られる沼田晶弘・東京学芸大学付属世田谷小学校教諭（42）が学級運営のコツなどを語った。

沼田教諭は「ぬまっち先生」の愛称で知られ、読売教育ネットワークのサイトで自らのユニークな指導法についてのコラムを連載。教育関係者や保護者に好評を博した。

やる気はコップの水と同じ

講演で沼田氏は、「児童のやる気を引き出す方法は」と聞かれた場合には「無理です」と答えていることを紹介し、「やる気はコップに水がたまるようなもの。日頃から信頼関係の水をためることが大事」と強調。教師と児童との関係を上司と部下にたとえ、「部下と接するときも、どうやってこの状態に持っていくかを考えなければ。『部下が自分の言葉に反応しない』と思うかもしれないが、まだ水があふれていないだけ」と指摘した。

また、「相手に判断させる」ことの重要性について触れ、「『何時に出来るか』と聞いて、『12時ですね』と言わせたら勝ち。12時まで黙っていて、少しでも過ぎたら『話が違う』と言えばいい」と説明した。

信頼関係を築くには、「認められたいという思い」「失敗してもいいという安心感」を児童や部下に抱かせることがカギだとし、「お互いに信じる状況が続いていくと、（児童や部下は）意外と伸びてくる」とまとめた。

講演後は、人事向け情報サイト運営会社「ProFuture」の寺沢康介社長が特別質問者として立ち、「受け身の若手社員が多いのは、学校教育に原因があるという意見もある」と沼田氏の考えを尋ねた。沼田氏は、「受け身になってしまうのは、何かを言うと『指導』されてしまうから」などと、教師や上司側の問題を指摘。「自分の話ばかりする人がいるが、育った環境が違う。そこを理解し合えば、お互いにリスペクトできる関係が築けるのでは」と答えた。

ProFuture代表取締役社長兼CEOの寺沢康介さん

教師、企業が意見交換

その後の交流会では、読売新聞グループ本社の老川祥一・取締役最高顧問・主筆代理が「次期学習指導要領は基本的な考え方として『社会に開かれた教育課程』を打ち出しているが、これは読売教育ネットワークの理念と合致する」と述べた後、「さらに教育現場と企業の相互連携をお手伝いする。（皆様に）新聞を大いに活用していただきたい」などと挨拶した。

また、読売教育ネットワーク参加企業として年2、3回、学校現場に「金融経済」を教えている末広孝信・三井住友銀行CSR室長が企業を代表して挨拶。末広氏は読売教育ネットワークからの依頼を含め年13～14万人に行っている金融経済教育の実例を挙げながら、「お金にからむ教育は学校で教えにくいと聞くが、最近非常にニーズが増えている。金融の1丁目1番地として、読売教育ネットワークとともに、日本の経済教育を盛り上げていきたい」などと述べた。

交流会で主催者を代表して挨拶する読売新聞グループ本社の老川祥一取締役最高顧問

「高校生が社会を実体験」

昨年度の「早期医療体験プログラム」に生徒が参加した佐藤宰・千葉県立千葉高校校長は、教育関係者を代表して取り組みを語った。佐藤校長は「漠然と医者になりたいと思っていた生徒が目の前で心臓手術や治療を見学し、何もできない無力感に気づかされた」と述べ、「医療現場を目の当たりにした体験から、生徒は目指すべき医師像、どんな診療をしたいのかを具体的に考えられるようになった」と生徒の成長を促したプログラムを高く評価した。

交流会で挨拶する千葉県立千葉高校の佐藤宰校長

さらに、日本の高校生は自分が何をしたいかを考える力が、世界と比べて弱いと指摘される点についても触れ、「教室の中ではなく、実際に企業や工場に行って体験できれば、生徒たちの意識は変わる」と指摘。「高校側にとって、こうしたキャリア教育のプログラムは貴重。企業の協力を得て、一人でも多くの生徒に現場を体験させたい」と述べた。会場では、企業による出前授業などネットワークのさまざまな取り組みを映像や資料で紹介し、参加者が活発に意見交換した。

読売教育ネットワーク この1年の活動

読売教育ネットワークでは発足以来、
さまざまな特別授業や特別イベントを開催している。

参加団体　2017年11月22日現在

小中高…262、大学…59、企業…154、教育委員会…5　計480団体

出前授業・特別授業など　2016年10月～2017年9月

◇読売新聞による出前授業 …… 125
◇参加企業等による小中学校への出前授業 …… 70
◇大学や企業で定期購読の新聞を教材に、情報リテラシーや文章講座などを展開する「新聞のちから」 …… 26

主な特別授業

■ 早期医療体験プログラム
7～8月開催。順天堂大（東京）の天野篤教授、大阪大の澤芳樹教授による医学部をめざす高校生向けプログラム。25校32人が心臓移植手術などに密着。

■ 鍛える、食べる　トップアスリート1日合宿
8月1日開催。中高生がバドミントン五輪メダリストらから指導を受け、正しい食事の取り方も学ぶ。ネットワーク参加校7校から26人の生徒が参加。

■第14回 海外プロジェクト探検隊
7月31日～8月5日に実施。高校生6人が経済成長著しいミャンマーを訪れ、三菱商事のビジネスの最前線を視察。

トップアスリート1日合宿

早期医療体験プログラム

大会・イベント・セミナー

■ 書評合戦ビブリオバトル
お勧め本を出し合ってチャンプ本を決める大会。中学生、高校生、大学生の各大会のほか、書店員によるものも開催。

■ セミナー「大学の実力」を読み解く
9月30日に開催。「大学を偏差値で選んでいいの?」をテーマに大学の選び方を考える。

■ 夏休み親子新聞教室
7月27日、8月18、19日に開催。親子で好きな記事を切り抜いて世界に一つだけのスクラップ作品を作る。

■ NIE土曜サロン
新聞を活用した授業方法などを学ぶ勉強会。ほぼ月1回開催。

■ 第25回読売NIEセミナー
2月25日に開催。道徳が教科化されることに伴い、「道徳と新聞」がテーマ。

夏休み親子新聞教室

「大学の実力」セミナー

第4回 インターハイ新聞コンクール 最優秀賞に鳥取城北高校

選手一人ひとりの人物像に迫る

全国高校総体（インターハイ）や予選などを取材した学校新聞を顕彰する「第4回高校新聞部インターハイ新聞コンクール」（主催・読売新聞社、後援・全国高等学校体育連盟、全国高等学校文化連盟）で、鳥取県の鳥取城北高校新聞部が制作した「城北新聞」と速報版の「城北かわら版」が最優秀賞・読売新聞社賞に選ばれた。試合結果にとどまらず、けがやプレッシャーを乗り越えて奮闘した選手一人ひとりの人物像に迫った多角的な取材と構成が、高く評価された。このほか、記事や写真、企画などで優れた新聞を作った5校に優秀賞、12校に奨励賞が贈られた。今年は昨年より9校多い42校から応募があった。

「個性」がうかがえる紙面　全体講評

応募作品は今年も力作が多く、入賞作を絞り込むのに、審査員はかなり頭を悩ませた。インターハイを照準に練習を積み重ねてきた選手たちの息づかいや、チームを支える人々の熱い思いがストレートに伝わってくる紙面が目立った。

最優秀賞の鳥取城北高校もそうだが、入賞校の紙面は、要点を押さえた記事、的確な見出しなど、新聞づくりの基本をふまえたうえで、何らかのプラスアルファの価値を加味している。

ていねいな取材に裏打ちされたインタビュー、現場で起きたことを深く書き込んだルポ、いきいきとした動きのある瞬間を切り取った写真、大胆なレイアウト、精力的な号外発行……付加価値の内容はさまざまだ。それぞれの新聞部の「顔」や「個性」がうかがえる紙面は読んでいて楽しい。

新聞によっては、紙面スタイルが固まっていて、ややマンネリ化しているようなケースも見受けられた。従来のパターンにとらわれずに、独自の切り口からのコーナーがあれば、読者に与える印象はかなり変わってくるはずだ。新企画にもぜひ積極的にチャレンジしてほしい。

インターハイ新聞に限らず、紙面づくりの原点は基本的に同じだ。読者の知りたいことが書いてあるか。記事がわかりやすく書かれているか。読みやすいレイアウトになっているか。そして、ニュースを伝えているかも大切なポイントになってくる。大きな驚きはもちろん、小さな感動もニュースだ。足をどんどん使って、できるだけ多く人に話を聞き、新鮮なニュースを掘り起こしていきたい。

審査員長　中村 明

● 最優秀賞・読売新聞社賞　鳥取城北高校（鳥取県）

「城北新聞」第78,79号、「城北かわら版」No.139,140

多角的な構成

インターハイに出場する部活動が多く、県予選からインターハイ本戦の結果までしっかりと報道している。試合結果や選手、部長、顧問へのインタビュー、的確な写真など多角的に構成し、生き生きした紙面となっている。

人物をクローズアップしているところがこころにくい。78号では陸上部を特集している。その中で8名の選手を取り上げている。ケガやプレッシャーを乗り越えて、県大会で優勝や上位入賞した選手の言葉に、さらに上位を目指そうとする意気込みが込められている。インタビューする新聞部員に取材魂を感じることができる。コラム「群青」に「今年も県総体の季節がきた。同時に『学校の応援団』である新聞部はとても忙しくなる」とある。新聞部取材で学校を盛り上げようという機運が伝わってくる。ただ単に、試合結果を報道するだけでなく、「宝石のようにキラリ」と随所に読み応えがある記事が散りばめられている。さらに、掘り下げることによって人物をドラマ仕立てにできるともっと読み応えが出てくるであろう。（中根淳一）

最優秀賞を受賞して喜ぶ鳥取城北高校の新聞部員たち

● 優秀賞・ポカリスエット賞（ルポルタージュ）　長崎県立西陵高校

「西陵高校新聞」第55号、「西陵速報」第69号

フットワークのいい取材

「西陵高校新聞」と「西陵速報」は、いずれも、インターハイの魅力を中身の濃い紙面で伝えている。とりわけ、選手たちの人物像や「現場」に迫るルポは読者を記事の中に誘い込む効果を発揮している。

訴求力があったのは「西陵速報　第69号」のフロントページ「選手に密着」。カヌー部の1人の選手を文字通り「密着」取材した力作だ。「『強くなりたい』という高い志」「人一倍の負けず嫌いな性格」がこの選手の成長につながったとする顧問の先生の分析や、ペアを組む選手の談話も織り交ぜ、取材対象の素顔を多面的に描き出している。

選手の課題の一つである腕力アップのため、お父さんが自宅の庭に作った懸垂器具の記事は、緻密な取材でつかんだ興味深いエピソードだ。

記者が、練習場まで一緒にランニングを試みるなど、フットワークのいい取材ぶりにも好感が持てる。カヌーの平日の練習距離10kmを新聞部員が自転車で実際に走ってみる「試して納得!」もルポの原点である「現場第一主義」を実践した記事といえる。「西陵高校新聞」では、開会式で生徒と同じ体操服で行進した教頭先生の「サプライズ」を報じるなど、常に現場をウォッチしようという取材姿勢が感じ取れる。（中村明）

● 優秀賞（企画）　長崎県立長崎工業高校

「工業っ子」NO.150、号外、NO.151、NO.153、NO.154

記者の感動伝わる

新聞部員たちと、読者生徒と、そして取材対象の各部の部員たちも同じ学校に通う仲間。そんな距離感の近さが学校新聞の大きな特色で、とくにこの「工業っ子」は新聞部員が読者の代表として各部の仲間たちを取材し、応援する気持ちがそれぞれの記事から伝わってくる。報道文では基本とされる「だ」調ではなく、「です・ます」調を続けているのも、そんな親密さの表れだろう。

今回とくに目に留まった記事はNO.151の「この感動を伝えたい　高総体この一枚」だ。各競技会場での観戦取材中、4人の部員自身が感動した瞬間の写真を記事とともにまとめたもので、「少しでも写真の雰囲気が伝われば嬉しいです」とある。

読んでみると、雰囲気だけでなく、見出しの通り各記者の感動が伝わってくる。この記事は最初から予定されていたものかは不明だが、このような視角は高く評価したい。（牧野修三）

● 優秀賞（レイアウト）　石川県立金沢桜丘高校

「桜高新聞」第225号、「桜高新聞速報」第91,92号

臨場感伝わるレイアウト

オーソドックスな紙面作りであるが、写真、見出し、レイアウトがとてもよい。写真は紙面の上部に大きく、下に小さくという基本構成となっていて、非常に安定感がある。剣道部や卓球部の写真はイキイキしている。当日の臨場感が伝わってくる。また、見出しが非常に的確である。見出しの基本が見事にできている。

225号トップは「剣道部／北信越大会／四郎丸君個人3位／今までの成果をすべて出しきる」とあるように、種類、内容の2本を配し、3本目に本人の弁も出している。この記事だけでなく、本紙、速報すべての記事で試合結果や個人名など的確な見出しが付けられている。まさに、見出しをみれば記事が分かる。さらに、種類よりも内容の見出しを大きく扱っている点も評価できよう。

レイアウトでは、225号8面が秀逸。流し組みの紙面構成と見出し、写真のバランスが非常に良い。生徒の勇姿が伝わってくる。読んでみようという意欲がわいてくる紙面である。（中根淳一）

◆奨励賞（12校）　古川学園高校（宮城県）／福島県立郡山東高校／埼玉県立松山高校／富山県立富山商業高校／静岡県立韮山高校／滋賀県立虎姫高校／三重県立白子高校／兵庫県立神戸鈴蘭台高校／島根県立安来高校／大分県立玖珠美山高校／弘学館高校（佐賀県）／長崎県立長崎南高校

審査員　審査員長・中村明（読売新聞東京本社紙面審査委員長）
牧野修三（全国高等学校新聞教育研究会副会長）
中根淳一（神奈川県立大楠高校教諭）
秋山哲也（読売新聞東京本社教育ネットワーク事務局専門委員・元写真部長）

● 優秀賞（記事）　滋賀県立彦根東高校

「彦根東高校新聞」第468号、速報新聞キマグレ第1541号（ほか通算11号）

完成度高い記事

レイアウトなど新聞作りの技術面といい、きちんとした取材をふまえた記事内容といい、全体的に大変レベルの高い新聞だ。

1541～1576号は、高校総体というよりも各部活の紹介がメーンのシリーズだが、活動状況だけでなく、部長・部員・顧問の先生など多くの人にインタビューするなど、「濃い」内容になっている。とくに「縁の下の力持ち」と題してマネージャーや会計係などの部員にスポットを当てている囲み記事は注目される。

そのシリーズ記事で、当然だが、総体でより上に勝ち進むことが各部の目標として掲げられている。しかし、第一関門の県総体の速報が1576号の1枚に結果だけでまとめられてしまっているのはちょっとさびしい。来年に向けての課題としてほしい。（牧野修三）

● 優秀賞（写真）　崇徳高校（広島県）

「崇徳学園新聞」第224号、「崇徳学園新聞速報版」第271号（ほか通算37号）

表情や動きとらえた写真

さまざまな競技会場に足を運び、精力的に取材した成果が、なによりも速報版の写真に表れている。

県インターハイが始まると、気迫あふれる表情や動きをとらえた写真も増えてきた。「毎回ガッツポーズの集合写真だけではいけない」という反省を、6月以降の紙面に反映させた臨機応変さがあった。特に、準優勝の男子剣道、サッカーの準決勝進出試合、個人戦5階級制覇の柔道、2年ぶり54度目優勝の男子バレーボール、男子バトミントンの玉澤選手の写真は秀逸だ。応援に来られなかった生徒にも一体感を感じてもらおうと、写真を重視した取材姿勢は、生徒や学校関係者にもアピールしたことだろう。

素晴らしい写真を多く載せている学校は、見出しや原稿も充実している傾向がある。崇徳高校もその例外ではなく、取材した写真を、フロントで大きく扱うという首尾一貫した編集方針もそれを後押しした。それは部員のチームワークや、やる気も引き出し、紙面の熱気となって読む者に伝わっている。1面の5分の1程度のスペースを使い展開した「運動部を応援に行こう!」も好企画だ。来年は、選手や支える人たちの舞台裏にも切り込んでほしい。（秋山哲也）

経済成長 しっかりこの目で

ミャンマーに高校生６人

海外プロジェクト探検隊

主な日程

7月31日	ミャンマーへ出発
8月 1日	ティラワ経済特別区、シュエダゴン・パゴダなどを視察
2日	食品製造販売会社「ルビア・リミテッド」の営業活動などに密着
3日	マンダレー国際空港、オイスカの研修センターなどを視察
4日	ジャパンハートの児童養育施設を訪問 日本へ向け出発
5日	帰国

食品製造販売会社「ルビア・リミテッド」のインスタントコーヒー事業について学ぶため、スーパーマーケットを訪れた

ルビア社の営業活動を密着取材

児童養育施設「ドリームトレイン」では、ミャンマー語に翻訳した日本の絵本を贈るなどして交流を深めた

ヤンゴンの街角にて（左から）竹田さん、野平さん、岡田さん、大滝さん、渡辺さん、安藤さん

開発が進むティラワ経済特別区で

（左）三菱商事ヤンゴン駐在事務所で、真野英俊・ミャンマー副総代表の話を聞く
（右）ティラワ経済特別区内は、三菱商事から特区を開発・運営する会社に出向している下山洋一副社長（右）が案内してくれた

（左）国際NGO「オイスカ」が運営する農業指導者研修センターで、研修生と泥まみれになって田植えを体験
（右）マンダレー国際空港を視察

高校生を海外に派遣して三菱商事のビジネスの最前線を視察したり、現地の人たちとの交流を通じて学んだことを発信したりする「海外プロジェクト探検隊」（主催・読売新聞社、特別協賛・三菱商事、後援・駐日ミャンマー連邦共和国大使館）が7月31日～8月5日に実施された。14回目を迎えた今回の訪問地は、経済成長が著しいミャンマー。6人の高校生が「国の発展と成長を支えるビジネス」をテーマに、最大都市ヤンゴンと第二の商業都市マンダレーに飛び、工業団地や空港などを巡った。

日本企業が発展の土台作る

三菱商事は事業に投資するだけではなく、社員が投資先に出向して主体的に経営に関わりながらビジネスを展開している。探検隊は、日本とミャンマーが官民を挙げて共同開発を進める「ティラワ経済特別区」の工業団地や、食品ビジネスの現場、日本企業が100％民間資本で海外の空港運営を担う初のプロジェクトとして注目を集めるマンダレー国際空港などを取材した。水道から電気にいたるまでインフラ設備が十分に整っていないミャンマーで、現地の人たちと協力しながら生きと働く日本人たちの姿を目の当たりにし、高校生たちは日本企業のビジネスが、ミャンマーが発展していく上での土台を作っていることに気づいた。

また、三菱商事がCSR（企業の社会的責任）の一環として支援しているNGO（民間活動団体）の活動現場も訪れた。NGO「オイスカ」が農業指導者を育てるためマンダレーに開設した研修センターでは研修生と意見交換したほか、田植えも体験させてもらった。国際医療NGO「ジャパンハート」がヤンゴンで運営する児童養育施設では、貧困や親との死別など家庭に問題を抱えている子どもたちと交流した。

第14回 海外プロジェクト探検隊 参加者

大滝梨乃　渋谷教育学園渋谷高等学校2年

まさに発展途上にある国

初めて訪れたが、壁がはがれ落ちそうな古い建物があるかと思えば、新しい高層ビルが立ち並んでいたりして、「まさに今、発展途上にある国なんだ」と実感できた。街はとてもにぎやかで活気があり、「エネルギーにあふれている」という感じだった。今回の訪問で見た街の様子は、経済成長が続くことで大きく様変わりするだろう。とても貴重な「今」を体験できた5日間だった。

安藤奈々　成蹊高等学校2年

人々の温かさ･活気に触れた

今回の取材を通し、ミャンマーの人々の温かさを体感できた。実際に肌で人々の活気に触れ、この活気こそが、これからこの国が国際社会の中で大きな存在となっていく原動力となるのだろうと感じた。インフラもまだ十分に整っていないミャンマーで、一生懸命に働く日本のビジネスマンの姿にも感銘を受けた。この濃密な経験は、間違いなく私の人生に大きな影響を与えると思う。

岡田真一　大阪府立茨木高等学校2年

まだ貧しいが 未来が楽しみ

ミャンマーの人たちからは「発展して豊かになろう」という明るい未来への希望やエネルギーを強く感じた。まだ国は貧しく、街は停電が多かったり、医療施設が少なかったりと課題も多い。日本をはじめとする先進各国の企業には、環境対策など教訓を生かしながら、持続可能なかたちでこの国のさらなる発展に寄与してほしい。未来のミャンマーがどうなるのか、今から楽しみだ。

渡辺星之進　千葉県立千葉高等学校2年

積極性 自分も見習わねば

日本では味わえないような活気を感じることができた。なかでも、農業研修センターで交流した農業青年たちは、まだ20歳前後という若さにもかかわらず、日本の農業技術を積極的に吸収し、自分たちの故郷の発展に生かしたいという熱い思いを持っていた。より良い未来に向けて、自ら積極的に行動する。そんな彼らの精神に、自分自身も見習うべきことが多くあったように思う。

竹田圭佑　横浜市立南高等学校2年

発展に影響 日本企業に驚き

探検隊を通じて、これまで全く知らなかったミャンマーという国と、海外で働くことについて深く知ることができた。日本企業の仕事が、これほど他国の経済成長や発展に影響を与えているとは思ってもみなかった。現地の人たちの生活習慣や文化を尊重し、人と人とのつながりを大切にしながらビジネスを展開している様子がとても印象的だった。自分も将来、海外で働きたい。

野平遥紀　埼玉県立川越女子高等学校2年

ビジネスマンの情熱感じた

ミャンマーで働く日本のビジネスマンの情熱がこの国の経済成長を支え、両国の信頼関係の礎になっているのだと感じた。デコボコの道路や高層ビル、きれいな車が走る横で草をはむ牛。ミャンマーの人が、10年前には思い描くことができなかった姿だが、10年後には見られなくなる姿でもあるだろう。またいつかこの国を訪ね、この国のさらなる未来の姿を自分の目で確かめたいと思う。

第66回 読売教育賞

※敬称略

最優秀賞　10件

■ 理科教育
科学部活動を通して、自分を見つめ、前進しようとする生徒を育てる
佐藤由美　秋田県由利本荘市立大内中学校教諭

■ 社会科教育
上機嫌な授業のために「現代社会授業ノート」の活用と「最近の出来事」を軸として
川末修　宮崎県立宮崎農業高校教諭

■ 健康・体力づくり
中学生の生活習慣の確立を目指した健康教育の実践
岡山市立西大寺中学校　代表・梶原敏

■ 外国語・異文化理解
生徒の柔軟な発想を生み出すプロジェクトを軸にした授業
田中里美　金沢大学人間社会学域学校教育学類付属中学校教諭

■ 児童生徒指導
大規模な専門高校で教育相談を校内に浸透させるまでの取り組み
金沢容子　茨城県立水戸工業高校教諭

■ カリキュラム・学校づくり
「科学課題研究」を中心に据えた女子の理系進学支援教育プログラムの開発
ノートルダム清心学園清心女子高校（岡山県倉敷市）　代表・秋山繁治

■ 地域社会教育活動
地場産業を軸とした地域連携
大阪府立堺工科高校定時制の課程　代表・保田光徳

■ NIE
まわしよみ新聞 新聞の魅力・可能性を伝えるNIE
まわしよみ新聞実行委員会（大阪市）　代表・陸奥賢

■ 幼児教育・保育
日本の伝統文化 カイコの飼育体験を通して
小林真理子　社会福祉法人峰悠会おおぞら保育園（群馬県桐生市）保育士

■ 美術教育
「地域の色・自分の色」をテーマとした美術館×学校×地域の取組
「地域の色・自分の色」実行委員会（大分市）
代表・照山龍治

優秀賞　15件

■ 国語教育
◇田畑栄一　埼玉県越谷市立東越谷小学校校長

■ 算数・数学教育
◇小林廉　東京学芸大学付属国際中等教育学校教諭
◇信夫智彰　山形県遊佐町立遊佐中学校教諭

■ 社会科教育
◇久保貴史　埼玉県熊谷市立大原中学校教諭
◇角崎洋人　大阪府枚方市立樟葉南小学校教諭

■ 生活科・総合学習
◇兵庫県高砂市立北浜小学校　代表・松田敦子
◇藤井健太郎　岐阜県関ヶ原町立今須中学校教諭

■ 外国語・異文化理解
◇芥川明子　さいたま市浦和区
◇大滝修　茨城県立取手第一高校教諭

■ カリキュラム・学校づくり
◇埼玉県所沢市立三ヶ島中学校　代表・沼田芳行

■ 地域社会教育活動
◇菊川裕幸　兵庫県立篠山東雲高校教諭
◇山口県下松市立図書館　代表・長弘純子

■ NIE
◇京都市立葵小学校　代表・小林正幸
◇東京都武蔵村山市教育委員会　代表・今井一馬

■ 美術教育
◇山崎仁嗣　滋賀県立膳所高校教諭

表彰式で受賞者らと懇談される高円宮妃久子さま（右）

最優秀賞に「まわしよみ新聞実行委」など

学校や地域での優れた教育実践を顕彰する「第66回読売教育賞」は、全13部門に143件の応募が寄せられた。最優秀賞は10部門で10件、優秀賞は9部門で15件が選ばれた。最優秀賞の表彰式は11月17日、高円宮妃久子さまをお迎えし、東京・大手町の読売新聞東京本社で行われ、受賞者に盾と副賞50万円が贈呈された。最優秀賞の中から、NIE部門と美術教育部門の実践を紹介する。

カフェでスタート 世界に広がる

今回、新設されたNIE部門。「まわしよみ新聞実行委員会」（大阪市）の取り組みは「遊び」から始まった。

「まわしよみ新聞」は何人かで新聞を持ち寄り、好きな記事を互いに紹介しながら、その記事を1枚の大きな紙に再編集して貼り、独自の壁新聞を作る。時事知識が身につくとともに、他人の興味を通じて、自分自身の社会への関心も深めていける。

2012年に大阪市内のカフェで始めたところ評判となり、子どもから大人までが楽しめる遊びとして広まった。現在は、小学校から大学までの教育現場でもメディア・リテラシーを養う取り組みとして実践されている。台湾の銘伝大学で日本語教育の一環として正規採用されるなど、世界へも広がっている。

同実行委員会の代表、陸奥賢さんは「新聞離れが言われている今こそ、新聞の魅力を再発見してほしい」と話している。

鉱物や植物などで絵の具作り、好きなもの描く

美術教育部門の「『地域の色・自分の色』実行委員会（大分市）の実践は、大分県の離島、姫島の小中学生を対象としたものだ。

児童・生徒が野外で集めた、自分の好きな色の鉱物や植物などで絵の具を作り、それで「自分の好きなもの」をテーマに絵を描く。子どもたちの地域への関心が高まるとともに、地域の魅力を再発見した。また、絵を完成させる達成感がやる気を引き出し、学習態度などに良好な変化が見られた。

実行委員会代表の照山龍治さんは「取り組みを通じ、子どもたちの島への愛着が増した。この活動が他の地域にも広がれば」と話している。

歯のケアの大切さ実感

東京・第二辰巳小 × フィリップス

フィリップス・ジャパンによる出前授業「はみがき講座」が10月24日、東京都江東区の第二辰巳小学校（遠藤朋子校長）で行われた。同社から歯科衛生士の上村泰子さんが講師として来校し、5年生の3クラス、約100人に歯みがきの基本について話した。

授業では、歯の大切さや歯をきれいにする道具、歯ブラシ、電動歯ブラシ、デンタルフロス、歯間ブラシ、マウスウォッシュの使い方などを説明した後、電動歯ブラシ「ソニッケアーキッズ」を生徒が実際に使用した。歯みがきアプリを使って、みがき具合などをプロジェクターに投影、全員で一緒に歯みがき体験した。

1秒間に振動500回

使用するアプリは子供向けで、同社のキャラクター「スパークリー」がガイド役として出てくる。また、子供達に歯ブラシの振動に慣れてもらうために、まずは頬や手に当てて恐怖心が取れてから口に入れるなど、親しみやすいようさまざまな工夫をしている。

子どもたちからは「スパークリーのまねをして歯をみがくと、普段より上手にみがけたような気がした」（男子）、「電動歯ブラシは1秒間に500回振動すると聞き、手みがきとすごい差だと思った」（男子）、「プラークという名前をはじめて聞いた。このプラークをなくすためにしっかり磨きたい」（女子）、「電動歯ブラシでみがくとき、母から『動かさないで』と言われるのはなぜだろうと思っていたけど、やっとその理由がわかってよかった」（男子）といった声が聞かれた。

模型を手に歯みがきの基本を話す上村泰子講師

全身の健康にも影響

授業の最後に、上村講師は「歯をケアすることは、口だけではなく全身の健康にもつながります。手みがきであれ、電動であれ、歯みがきをきちんとすることの大切さを皆さんに少しでも理解してもらえたら」と口腔ケアの大切さを強調した。

養護教諭の増野香先生は「学校ではなかなか行うことのできない内容の歯科指導で、子どもたちも釘付けになっていたように感じた。次年度以降もぜひまたお願いしたい」と話していた。

丁寧な指導で電動歯ブラシをマスターした児童

新聞をテーマにした出前授業を受ける生徒たち

小売業、金融、情報活用 新聞社のテクノロジーなど学ぶ

神奈川・大船中 × セブンイレブン、三菱東京UFJ銀行 日立製作所、読売新聞

複数の企業による出前授業が10月26日、鎌倉市立大船中学校（三好晃秀校長）で開かれた。

企業の役割や働く意義を学んでもらう取り組みの一つで、同中では2014年から毎年開催。この日は銀行員や大手メーカー社員らが3年生約140人に授業を行った。

セブン-イレブンの「『近くて便利』を考える」は、小売業のしくみと日本社会の現状を結びつけながら学ぶ出前授業。三菱東京UFJ銀行は「金融経済、銀行のしくみを学ぶ」を、日立製作所は「みんなで考える情報活用の『秘訣』」としてグループワークも用いた考える授業を展開した。

「新聞、読むと面白い」

「新聞社のテクノロジー」をテーマにした読売新聞東京本社制作局技術二部の池田智康部員（31）は、新聞の製作工程などを説明。生徒たちは新聞を手にしながら熱心に聞き入った。

授業を受けた男子生徒（15）は「届く直前まで新聞が印刷されているとは知らなかった」と驚き、「新聞は今まであまり読んでいなかったが、実際に読んでみると面白いと思った」と話していた。

海外で学ぶ・リレーエッセー㉟

米アーラム大 AIを開発し、人間の謎を解く

暁星高校（東京都）卒、アーラム大1年（執筆時）
小林（こばやし） 聖弥（せいや） さん

大学の入り口前で＝本人提供

「ハーイ、ニール！週末はどう？」「ヘイ、セイヤ。グレート。君はどうだった？」

アーラムの毎月曜日、教室で聞かれる典型的なやり取りだ。代わり映えしないように見えるが、一つ断っておきたいのは、ニールがクラスメートではなく、教授である、ということだ。アーラムでは、肩書きや地位に関わらず、誰もがファーストネームで呼び合うことになっている。このような小さなコミュニティーで1学期半ほど過ごしてみて、困っていれば誰かが声をかけてくれるありがたみを再認識している。

高校時代、自分の居心地のいい環境から出てみたらどうか、と背中を押してくれたのは、自分自身の好奇心であった。「これからの4年間を、日本の外で過ごすなんて、粋じゃないか？」

私の旅は、こんなささやかな好奇心から始まり、道半ばで野心となり、最後には確固とした決意に変わり、気がつけばアメリカの大学に必要なアプリケーション「コモンアプリケーション」の「出願ボタン」を押していた。「自分はアメリカに行くべきだ。行かなければならない」。このことばを肝に銘じ、2016年8月、全く新しい環境に飛び込んだ。

アーラム大学は第一志望ではなかったが、いざ来てみると、際立った学生や優秀な教授陣に恵まれた教育環境であることがつくづくわかった。毎週のグループ課題後の会話で取り交わされる膨大な知識やアイデアをもってすれば、この世界をもっと広い視野で観察できるようになるのではないか、と感じた。また、この大学では教授の自宅を友人と訪問し、夕食を囲みながら日ごろの悩みや心配事を分かち合うことも出来る。そしてなによりも、コンピューター・サイエンスの分野における自分の未来を導き出してくれたのは、この活気あるコミュニティーであった。

多くの学生がこぼすように、何を専攻し、卒業後何をするのかは、いまだに想像もつかない。しかし、幸運なことに最近、コンピューター・サイエンス学部の教授たちとのやり取りを通して、人工知能（AI）なんてどうだろうか、とふと思いついた。大学での残り3年間、AIに関する研究をしながらも、様々な分野のコースを履修して人間の思考過程を理解し、またそれを工学と結び付けながら、人類の謎を解く。と同時に、AIの潜在能力を開発する。今はそんなことを考えている。これも全て、アーラムが教えてくれたことなのだ。

（会報編集部抄訳 The Japan News 2017年5月4日）

アーラム大学

米インディアナ州リッチモンドにある1847年創立の私立のリベラルアーツ・カレッジ。学生数は1060人で54か国からの留学生が21.5%を占める。

海外留学を目指す高校生に進学支援を行っているNPO法人「留学フェローシップ」のメンバーが、海外のキャンパスライフをリレー連載します。留学フェローシップの詳細はウェブサイト（http://ryu-fellow.org）へ。

英語の原文は http://the-japan-news.com/news/article/0003609634 でお読みいただけます。